

大塚勇一郎教授記念号によせて

この3月、大塚勇一郎先生はご定年とされました。これまで先生が経済学部において果たされた大きな功績に感謝し、『立教経済学研究』は、ここに本号を「大塚勇一郎教授記念号」として刊行します。

大塚先生は、静岡大学人文学部より1994年4月に本学に教授として赴任されてから本年3月まで14年にわたり、経済学部および大学院経済学研究科において経済理論を中心に学生・院生の指導にあたってられました。この間、学部では「経済原論B」や「近代経済学」、大学院では「近代経済学特論」などを担当してこられました。これすなわち、経済学の理論教育における中心部分を担ってきたわけであり、多くの学生たちが、大塚先生の授業を通じて、経済理論に触れ、理論的に考えることの大切さを学んでいきました。

また大塚先生は、1997年4月から1999年3月まで大学院経済学専攻課程主任を務められ、執行部の一員として学部運営に貢献されました。先生の温かな語り口と誠実なお人柄がもし出す雰囲気は、私たちスタッフの教授会をはじめとする共同作業の場では大きな財産です。ありました。

先生のご専門はケインズ研究を中心とする経済理論の彫琢ですが、なによりも現在の主流である新古典派に代替すべきものの模索に精力を注ぎ込んでこられました。理論家としての良心にもとづいて行われたケインズ、スラッファ、パッシネッティの系譜に伏在する主流派批判の契機を検討された作業は、学界においても異彩をはなっております。またその模索過程では制度派経済学の潮流も視野に含まれ、制度派の泰斗ホジソン氏を本学に招かれて研究会を主催したこともあります。

経済理論の世界では、主流の新古典派が、様々な条件の下での均衡点の有無や均衡解の模索過程を探るという、市場（交換過程）を主戦場とした一般均衡理論のフレームワークの中での作業に精力を注いできましたし、今もそのようです。「均衡」の語すら嫌う新オーストリア学派にしても、市場過程を考察の主対象に据えており、いわば「カタラクシー」に狭隘化したかの観があります。こうした中であって、大塚先生の関心は、資本による生産過程と、その技術変化・生産性変化をも捉える「構造動学」に向けられました。Political Economyの時代には、いかに資本を蓄積し生産力を伸ばすか、という関心から経済認識が深まっていったのですが、Economicsの時代になるにつれて経済の動態を理論的に捉まえようとする姿勢が弱まったように思えます。その意味で、大塚先生は、古典派以来の経済学の王道を歩まれてきたわけであり、

いま手元の大塚先生編『現代経済学への誘い』（八千代出版）を繙いてみますと、先生が編者として記された「はじめに」では、短文のなかにも経済理論戦線鳥瞰図が描かれ、とくにケインズ理解の多様性が印象的に語られております。これすなわち、教科書的理解の理論的根拠の危うさの指摘でありましょう。また先生ご担当の「構造動学の経済理論」の章は、経済学史の略述により「生産」を扱い「動学」を扱うことが理論的にいかに重要であることを示しております。そしてこの章には、不変の「価値尺度」論や、いわゆる価値・価格の「転形問題」が、現代の理論的ツールによってどう解かれるかが、系論として論じられています。先生の記述は、言外に、経済理論的思考の流れの中でスラッフアやパッシネッティの仕事が出るべくして出た、と語っているように思えます。

幅広い知見をお持ちの理論家大塚先生は、若手教育にも熱を注がれ、大学院で先生が主催したセミナーには多くの若手が参加し、厳しくも暖かいご指導を受けて、いま研究者として育っております。とくに先生は、これを研究会組織にまで拡充して学内研究費を調達しておられました。このご努力には頭の下がる思いです。

最後に私事にわたりますが、1983年にケインズ生誕百年を記念した『経済セミナー』特集号で「大塚勇一郎」の名前を見ていた私は、立教大学で大塚先生をお迎えすることになったとき、ひそかに胸をときめかせた、という思い出があります。その大塚先生が、教授会の席上、理論の説明に関わる私の素人的質問に、実にていねいに、素人の私に分かる説明をして下さり、私は胸の中で手を合わせて感謝したものです。

大塚先生は、「定年後は、これとこれと……を読みたい」と、膨大な読書計画を立てておられました。まずはご健康にくれぐれもお気をつけて、読書を心ゆくまで楽しんでください。これまでのご尽力に心より感謝申し上げますとともに、ご研究の進展をお祈り申し上げます。

2008年8月

経済学部長 小林 純